

あわや!!

薬学部
薬学科

准教授 千葉 薫



病院薬剤師として30年勤めた後、5年前に本学の教員になった。今回の原稿依頼を機に、学生時代を振り返ってみた。1972年に東北薬科大学に入学し、当時はまだ本学の開学前で、道内出身の同級生が100人以上もいた。2年先輩には本学の豊田教授や教室の先輩でもある唯野教授がいらっしや、卒後30年で職場が同じになるとは思いも寄らなかった。講義ではいつも眠くなり、試験前にはノートを借りていた。学生の教室配属制はなかったが、薬剤学教室に入り浸っ



紅葉真っ盛りの長野県戸隠にて(左が私)

ていた。何かと理由を付けて酒を飲み二日酔いに何度も苦しんだ。

学生生活で今でも時々思い出すことが2つある。1つはクラブで軽音は1年で辞めたが、座禅同好会というのがあり、不思議とこれは最後まで続いた。月1回の例会に加えて松島瑞巖寺での4日間ほどの合宿が春と夏休みの2回あり、早朝の粥座(お粥の朝食)から始まり作務や座禅など雲水さんと同じ生活をした。

最初は食事の作法がわからず合宿が終わったら胃が小さくなっていた。警策の響きが身体に心地よく、得難い経験であったが、座禅の経験がその後の人生に影響を与えたことはなかった。

もう一つは、旅行中のアクシデントである。3年秋に友人の実家がある長野県に遊びに行った。スバル360で野尻湖や妙高などを巡り最後の日に戸隠神社へ行った。その杉林参道で私が5千円札を拾ってしまった。これ幸いと名物戸隠そばを堪能した(時効です)。これがいけな



座禅同好会の松島瑞巖寺での合宿にて、雲水さんと。(後列左から4番目が私)

かった。帰り道、下りの急な砂利道でつづら折りのヘアピンカーブを抜けた瞬間、大きな石にタイヤが乗り上げてハンドルが取られた。右側は絶壁で百メートル以上の谷底。何度か右に左に大きく蛇行し、何度も谷底に落ちかけ、もうだめかと思った瞬間、左側の山にぶつけて横転してやっと止まった。九死に一生を得た。もし谷底へ落ちていたら今はなかった。帰りに一切衆生救済のお寺である善光寺へお参りに行った(合掌)。

ふり返れば教室で多くのことを学び、大いに飲み、多くの友人を得ることができた楽しい学生時代であった。今でも道内の同窓会を札幌で毎年行っている。

私の学生時代

今、本学の教壇に立てられている先生たちは、学生時代をどのように過ごしていたのでしょうか。今回は千葉准教授と長谷川准教授のお二人に、当時の様子を語っていただきました。

諸師に導かれて

看護福祉学部
臨床福祉学科

准教授 長谷川 聡



中学の頃、自作ラジオで聴いたアンドレス・セゴビアのギターに感激した。高校の自由研究でインカ帝国の縄文字を調べて遺跡と文字に興味を持った。スペインと中南米を学ぶならばと一浪して上智大学に入学し、スペイン語と言語学を学び始めた。

音声学の講義で中野一雄教授と出会い、



学部のオリエンテーションキャンプ(一番右が私)

失語症と脳の言語機能の講義に感銘を受けた。相談したら、フランス語学科に外国語教育と聴覚言語障害リハビリテーションを研究している教授がいると言う。志を変えて大学院に進学することを決めた。スペイン語と言語学の師であるフェリス・ロボ教授に洪々の許可をいただいて、階上の研究室の扉をたたいた。それが卒後もお世話になるクロード・ロバールジュ教授だった。

大学院に進学して、私は教授の運営する聴覚言語障害研究センターに籍を置いた。教授は私が音楽・芝居・機械好きと知っていた。聴覚障害児の発話リズムの研究を勧め、必要ならどこへでも行って来いと言った。教授は心が広く、私はその言葉に甘えた。同じ言語学科にいらっしやる先の中野一雄教授に音声分析を、金田一春彦教授に日本語を、学科を超えて理工学部へ電気音響とコンピュータを、経済学



卒業公演のスペイン語劇「El cielo dentro de casa」(左が私)

科へ統計分析を、心理学科へ発達と教育を習いに通った。

大学は勉強だけではなかった。学部一年の頃はオーケストラでオーボエを吹いた。だが予算と才能と学業成績が付いていかず涙ながらに断念した。その相談にのってくれたのが顧問のアルフォンソ・デーケン教授だった。後に仕事で再会するとは思ってもよらなかった。しばらく勉強ばかりしていたら、級友とハイメ・フェルナンデス教授からスペイン語劇に誘われた。それが今の仕事に繋がるとは、これもまた予想外だった。

学び、遊び、友がで、恋もした。その話は紙幅がないので別の機会に。1975年から1982年まで、私の学生時代は多くの師と友人との出会いだ。永く懐かしい学生時代が、今もあの東京四谷の空の下にある。